

乾癬患者の望む治療と 乾癬治療のこれから

—生物学的製剤の導入を迎えて—

前回の P.S. Information vol.1 では、「乾癬患者における低い治療満足度」という調査結果について東京慈恵会医科大学の中川先生のご意見を伺い、その中で「患者ニーズの把握」が治療満足度を改善するポイントとして浮かび上がった。今回の P.S. Information vol.2 では、「わが国における乾癬治療のこれから」を考えるために、今後の患者ニーズの変化や、新たに導入される生物学的製剤が乾癬治療に与える影響についてお話しいただいた。

監修／インタビュー
東京慈恵会医科大学
皮膚科 教授
中川 秀己



● 乾癬治療の進歩と変化し続ける乾癬患者ニーズ

乾癬が難治性の慢性疾患ということもあってか、これまでは治療効果や治療の簡便性などの問題に対しあきらめに似た意識を持つ方が多かった印象があります。不便や不自由が当たり前という考え方です。しかし新しい治療法に関する情報が患者さんにも届くようになりましたから、外用薬だけではなく、より簡便な既存の全身療法についてご存じの方も増えましたし、新たに導入される生物学的製剤に対し強い興味や期待を抱いている方も多くいらっしゃいます。実際、日本での調査でも、既存の治療によって「症状が改善した」と患者さん自身が評価している割合が約6割ではありますが、同時に約7割の患者さんが「もっときれいにしたい」、「治療効果を早く出したい」と考え、多くの患者さんがより積極的な治療を望んでいることが明らかです。最近の乾癬患者さんは症状を改善するためだけでなく、乾癬治療によるストレスで継続が困難になったライフスタイルを取り戻すために、より積極的な治療を行いたいと

考える方が増えたように思います。そのような患者さんは、今後さらに増えると考えられます。

● 乾癬治療の進歩

～生物学的製剤の導入による今後の乾癬治療～

生物学的製剤は、新しい全身療法薬としてその作用機序、有効性と安全性、簡便性が注目されていますから、治療方針の決定に一定の影響を与えるでしょう。もちろん、現在の主流である「軽症の患者さんに対しては外用薬から開始し、治療効果をみながら難治性の方には全身療法も考慮する」という乾癬治療の枠組みに大きな変化があるとは思いません。

しかし、生物学的製剤を重症患者のための治療と単純に位置づけるのは、適切ではないでしょう。生物学的製剤を選択する目安としては、皮疹面積10%以上、PASIスコア10以上、DLQIスコア10以上のいずれかを満たす患者は重症なため積極的な治療が求められるという”Rule of 10s”がありますが、これに該当しない患者さんは生物学的製剤による積極的な治療が不要なのでしょうか。たとえば、皮疹の症状が一見軽くても、それが広範にわたる患者さんでは外用薬は塗布の点で現実的ではありません。必然的に生物学的製剤を含めた全身療法を考慮することになります。関節症状がある場合、早期に生物学的製剤を導入して、関節破壊の進行を止める必要があるなど、患者の背景によっての使い分けが求められることとなります。

そういった意味では、既存の治療法に、QOLの側面や関節症状の有無を加えた治療アルゴリズムの必要性があるといえるかもしれません。

治療法の進歩がもたらすのは、症状改善効果だけではない。既存治療に起因するストレスの軽減があり、患者ニーズ自体も変化させていく。そして、わが国でも導入を迎える生物学的製剤は、患者QOLのさらなる向上という進歩に貢献できる乾癬治療薬と考えられる。

P.S. 中川先生より

生物学的製剤の登場により、より高い皮疹の改善効果が期待できます。これにより患者さんの満足度の高い治療を提供できるでしょう。

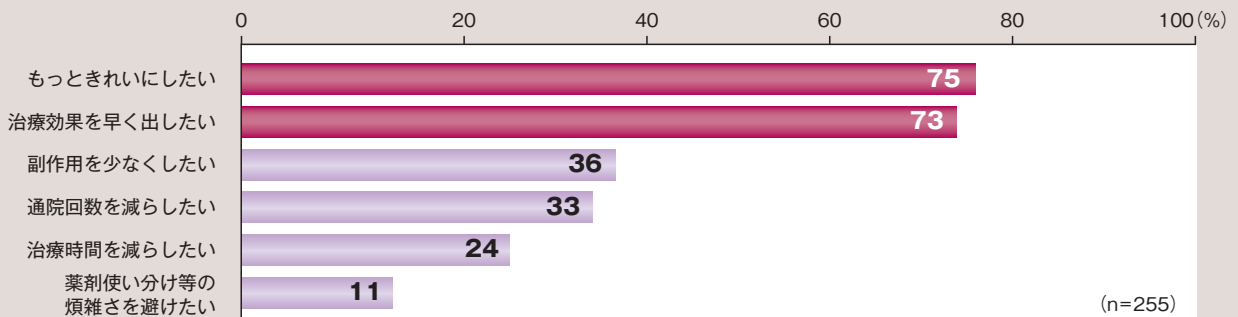
また、関節症性乾癬にも適応があり、関節症状がある患者さんに対しても有益な薬剤であるといえます。抗体療法の登場により、関節リウマチなど他の疾患と同様に、乾癬治療においてもパラダイムシフトが起こり、乾癬患者に多大な利益をもたらすことになると思います。

DATA View

「患者の望む治療」を実現するための重症度評価

乾癬治療に対する患者の希望

乾癬患者262例とその主治医を対象に2002年3月から6月にかけて実施された患者満足度調査によると、乾癬の患者さんの75%は、「もっときれいにしたい」、73%は「治療効果を早く出したい」と考えており、より積極的な治療を望んでいることが明らかにされています。



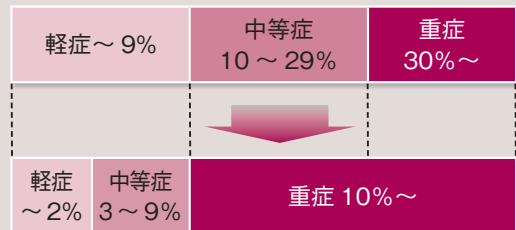
根本 治 他, 日皮会誌 113 (14) : 2059-2069, 2003

日本と米国の比較

一皮疹の範囲による重症度定義

乾癬の重症度を体表の患部面積で評価する場合、日本の専門医の認識では30%以上を重症としています。米国では10%を超えるものを重症と定義し、新規治療法や全身療法の適応の目安ともなっています。

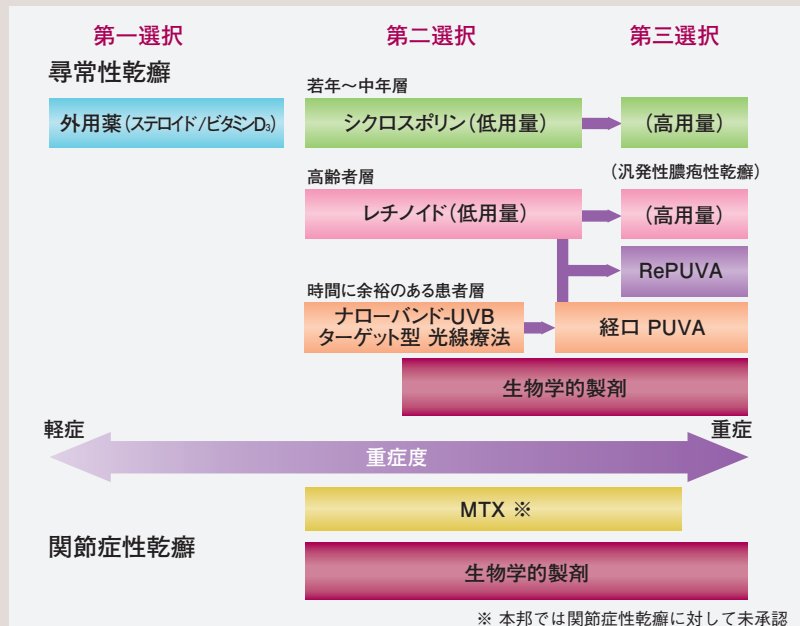
日本の認識 (皮膚科医)



梅澤 慶紀, 日皮会誌 116 (12) : 1721-1738, 2006

全身療法 (生物学的製剤を含む) の治療アルゴリズム

乾癬治療は、重症度と患者のニーズに応じて、外用薬を基本とし、第二選択、第三選択と治療の幅を広げていくことが推奨されます。全身療法では、患者層に応じて各治療法を使い分けますが、あらたなオプションとして生物学的製剤が加わりました。また、関節症状を合併する場合、生物学的製剤やメトトレキサート (MTX: 本邦では関節症性乾癬に対して未承認) を含む早期からの全身療法の導入が推奨されます。日本皮膚科学会の「乾癬におけるTNF α 阻害薬の使用指針および安全対策マニュアル」も参照することが奨められます。



東京慈恵会医科大学皮膚科 教授 中川 秀己先生 ご提供